国内事例 in Japan 2

多様な連携から実現した「気候変動×防災×男女共同参画」実践プログラム／千葉県　流山市

「気候変動に適応した実践型防災教育～避難所開設訓練in流山」の様子

「ジェンダー・ギャップ指数」をご存知だろうか？　世界経済フォーラムが、経済、教育、健康、政治の分野における男女平等に関する状況を各国ごとに数値化したものである。2024年の日本のジェンダー・ギャップ指数は、146カ国中118位で、主要先進国（G7）のなかで最下位だ。また気候変動は、もはや「気候危機」とも言われる現在、想定を超える気象災害が各地で頻発し、防災・減災への対策が喫緊の課題となっている。

一見遠い問題であるこの2つのテーマをかけ合わせて、男女共同参画社会に取り組む団体が千葉県流山市にある。

「気候変動×防災×男女共同参画」の視点を入れた「避難所開設訓練プログラム」

2024年3月、千葉県流山市の生涯学習センターで「気候変動に適応した実践型防災教育～避難所開設訓練in流山」が開催された。気候変動の仕組みや緩和・適応などの対応策、地域の地形の成り立ちと、水害ハザードマップの見方や危険箇所について学んだ後、避難所開設訓練を実施するプログラムだ。この訓練では、実際に避難所を開設する際に発生すること、自分自身が出来ること、やるべきことをリアルに体験する。この日も「避難所はその時その場にいる市民自身が開設し運営する」という認識の共有から始まり、避難所のレイアウトの組み方、避難所に来る可能性のあるさまざまな方への対応、段ボールベッドやテントの設置など、具体的な訓練が行われた。この取組を実施しているのが、流山防災まちづくりプロジェクト（以下、NBMP）である。

NBMPは、NPOパートナーシップながれやま主催の「女性防災リーダー養成講座」修了生16名により2019年4月に結成された。同プロジェクト代表の矢口輝美氏は、それまで防災に特別な関心はなかったが、知人の誘いからたまたま参加したこの講座で「災害時に行政が準備が出来る時は、行政が避難所を開設してくれるかもしれないが、地震など行政が準備が出来ない場合は、その時その場にいるメンバーで避難所を開設する」ということを初めて知り衝撃を受けたそうである。現在、同団体は「気候変動×防災×男女共同参画」の視点を入れた「避難所開設訓練プログラム」の展開により、日常生活の中にジェンダー意識を取り入れることを目標に活動している。

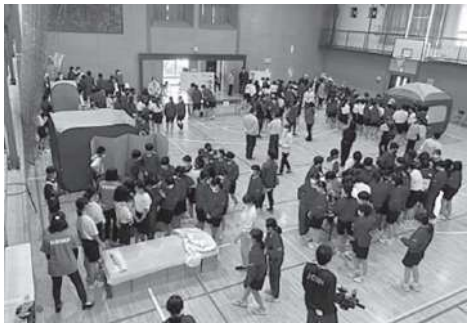
パートナーシップ実現につながった転換点

NBMPは2019年の活動開始以降、わずか5年で地元流山市の小中学校をはじめ、東京都中央区など他の自治体、JICAや子ども食堂など市民活動団体とのパートナーシップを広げている。前述の「避難所開設訓練in流山」は、ガールスカウト「地域で防災を考える会」との連携で行われた。一連の講義および避難所訓練

を実施した後、ガールスカウトの指導者が中心となって、「ジェンダー平等の視点から考える避難所」についてワークショップを実施したものである。

多様な連携が進むようになった一因として、矢口氏は「積極的に自分の活動のことを話さなくなった」という行動の変化を挙げる。それまでは、他の活動をしている団体や個人に対して「私の活動はこうです。あなたの活動は？」という自分の活動紹介で終わってしまうことが多く、連携やパートナーシップになかなかつながらなかった。しかし、それぞれの活動の目的をベースに、共通する目標を探して同じ部分や重なるところを発見する視点で話すようになってから、他団体との連携が進むようになった。共通点を見出すのはそう簡単ではないが、個別の活動ではなく、大きな視点で互いの取組を見て共有出来る目標を発見し「会話の中から相手がやりたいことを見つけてオファーする」ことで、目的に向かって手をつなげる人が増えたと実感している。

転換点は他人への話し方だけではなく、内面の意識の変化もあった。「そもそも自分たちが達成したいことは何か」という目的に立ち返ることの重要性も矢口氏は強調する。活動を始めた当初「避難所開設訓練をたくさんやりたい」と思うあまり、いつの間にかそれが目的になっていた。そんな時、活動のモデルとした先輩から「あなたは何のためにこれをやりたいのか。避難所開設訓練をやることが目的だとしたら、私たちの活動とは違う」と問われたことがあった。活動のメインのミッションは「ジェンダー平等」であり、それを一番具現化しやすい手段として「ジェンダー平等がなされた避難所運営」であることを改めて理解した。それ以降、自身の目的を明確にして話すことで、それを軸に相手との共通点を見つけることが出来るようになった。



令和４年、流山市立東部中学校でプログラムを実施

令和３年に初版を作成したハンドブックにも多様な連携が活かされている

関東地方ESD活動支援センターとの連携

「気候変動×防災×男女共同参画」の視点を取り入れたプログラムが出来た背景には、関東地方ESD活動支援センター（以下、関東ESDセンター）とのパートナーシップがある。NBMPと関東ESDセンターの出会いは令和３年の暮れ。丁度、関東ESDセンターでは「気候変動教育」をテーマにした次年度事業を構想中であったが、一般の人々には「地球温暖化＝自分ではどうしようもない」という意識の人が多く「じぶんごと化」してもらうには、どうすれば良いか模索していた。そこで気候変動の影響と言われる近年の水害の激甚・多発化を背景に、じぶんごとにしやすい「地域の防災」と「気候変動教育」を組み合わせたESDプログラムの開発を行うことで、NBMPと関東ESDセンターの連携に発展した。

令和4年度には、流山市立東部中学校の生徒を対象にESDプログラムとして気候変動：国立環境研究所気候変動適応センター、地理：流山市立博物館、防災：流山市役所防災危機管理課などの専門家による講義を実施した。この時に開発したESDプログラムをベースに、前述のガールスカウトとの連携などの広がりを見せている。まさに、それぞれがやりたいことを理解した上で共有できる価値を見付け出し、得意分野を持ち寄ることで実現することが出来た。矢口氏はその意義を、多様な社会課題とつなげることでプログラムそのものの社会的意義が強くなったと振り返る。

今後に向けて

数年前のNBMPの目標は、流山市の全中学校でプログラムを展開することだった。その時は「自分たちでプログラムを実施する」ことを前提としていた。しかし、今その目標は「全国で男女共同参画視点の避難所運営が当たり前になること」に更新されている。自分たちだけで実施するのではなく、これまで築いたパートナーシップをさらに広げていけば、この目標達成も夢ではないのではなかろうか。

記事：関東地方ESD活動支援センター（関東ESDセンター）伊藤 博隆・松沼 彩子